

症 例 報 告

(「地域薬学ケア専門薬剤師」の 50 症例用)

領域の分類 (細則「別表2」から選択)	15 悪性腫瘍	患者性別	男・ <u>女</u>	患者年齢	69
関与形態	<u>連携施設来局(調剤)</u> ・連携施設来局(OTC 等相談)・在宅・公衆衛生・基幹施設				
管理するプロブレム (上限 120 字)	アフアチニブによる副作用の重症化を未然に防ぎ、患者が安全に有効な治療を継続できる状態を図る				
自ら薬学的管理に関与した期間	自 2021 年 11 月 22 日 至 2022 年 4 月 25 日 ※「連携研修前の症例」の場合はシステムにチェックを入れてください。				
自ら薬学的管理に関与した回数	11 回 (内 フォローアップ 5 回)				
患者背景	自らの薬学的管理までの経過 (上限 190 字) アフアチニブ単独療法を入院にて導入。薬剤管理サマリーより、Day8 から下痢のためロペラミドカプセル 1mg(1 日 1 回)の定期内服開始を確認。Day31 より外来治療へ移行し初来局。ロペラミドは「自己調節可」の指示のもと隔日服用で下痢は Grade1 以下に制御されているが、手の乾燥のためヘパリン類似物質油性クリームが新規処方された。				
	病歴 (上限 130 字) EGFR 遺伝子変異陽性手術不能非小細胞肺癌 アレルギー・副作用歴:特になし				
	社会・生活歴(嗜好品含む) (上限 120 字) 独居、飲酒なし、喫煙 20 本/日 (20~66 歳)1 年前に禁煙				
	家族歴 (上限 60 字) 姉:肺癌				
	薬学的管理開始時の処方内容 (上限 250 字) (1) アフアチニブ錠 40mg 1 回 1 錠(1 日 1 回起床時) (2) ロペラミドカプセル 1mg1 回 1 カプセル(1 日 1 回就寝前)※自己調節可 (3) ヘパリン類似物質油性クリーム 0.3%手に適宜塗布				
	他科受診・併用薬 (上限 260 字) なし				

薬学的管理の要約（上限 1,000 字）	アフアチニブは重篤な下痢や皮膚障害（ざ瘡様皮疹等）の発現頻度が高く、重症化による QOL 低下や治療中断のリスクが極めて高い（文献 1、2）。そのため、服用期間中も含め新たな副作用の発現や重症化を未然に防止すべく、病院と連携してサポートしていくことを説明し、患者の了承を得た上で電話フォローアップ（以下 FU）を開始した。 Day45 の電話 FU の際、手の乾燥はヘパリン類似物質油性クリームを塗布し改善しているが、鼻周り、顎の一部にざ瘡様皮疹の発現（Grade1）があることを聴取した。（文献 1）を参考に、保清・保湿等のスキンケア方法について説明し、皮疹が広がる、悪化する場合は皮膚科受診を促した。また、Day34-39 にかけて下痢 5-6 回/日（Grade2）があり、ロペラミドは 2 個/日服用することもあったが、以降はロペラミドは 1 個/日、隔日服用で Grade1 であり、食事、水分摂取は問題ないと聴取した。念のため、下痢時はこまめに水分補給を行うことと、食事内容の注意点として、乳製品を避け、食事を小分けにし回数を増やすよう指導した。（文献 1） 聴取した内容について医師に情報提供が必要と判断し、トレーシングレポートで報告と処方提案を行うことにした。ざ瘡様皮疹について、次回診察時に症状が Grade1 以上であればミディアムランクのステロイド外用薬の処方追加、および下痢に対するロペラミドの処方日数・用量不足を回避するため、ロペラミド 2mg/日に増量を提案した（文献 1）。Day55 の診察時にロペラミドカプセル 1mg、1 回 1 個、1 日 2 回に増量されたが、ざ瘡様皮疹は、診察時に改善傾向のため、ステロイド外用薬の追加は見送られ保清、保湿のみで経過観察となった。Day69 の電話 FU の際、下痢はロペラミドを 1 日 2 回連日服用することにより Grade1 以下に改善し、以降もロペラミド調節で悪化はないと確認。皮疹はその後も発現するもののスキンケアのみで Grade1 以下を維持している。副作用に対し、服用期間中の FU を含めた継続的なモニタリングとトレーシングレポートによる支持療法薬の適正化により、副作用の重症化を防ぎ、休薬することなくアフアチニブの治療継続に寄与した。
文献 1	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社, ジオトリフ適正使用ガイド, 2021.
文献 2	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社, ジオトリフ錠 20mg/30mg/40mg/50mg 電子添文 2020 年 3 月改訂（第 1 版）.
文献 3	

（参考）本症例報告に記載された「薬学的管理の要約」は 921 字です。